

トプスが草食恐竜であるように、異形で武装したその内側に繊細な優しさや人なつこさ、寂しさを隠し、時と場所と相手に応じて、目まぐるしく、武装したり、武装を解いたりしていたのだ、と思えたのです。目に見える行為や外見だけにとらわれ、暴力や器物破損、校則違反などの責任と反省を問うだけの中学教師にとって、それは衝撃的な転機となり、今もなお浅間山の移ろう姿と重なり合うように思い起こす自戒です。

○千変万化の浅間山のように、子どもは刻一刻と変容する存在である。したがって、一つ二つの出来事で、児童・生徒のすべてを決めつけるような「レッテル」を貼ってはならない。

○浅間山はどこから見ても浅間山であるように、一面的な児童・生徒理解ではなく、あらゆる角度から子どもを見つめ、理解するように努める。

○浅間山の優美な外観が地中のマグマを覆い隠しているように、目に見える行為の責任と反省を問うだけの生徒指導ではなく、苛立ちや不満、不安、怒り、寂しさなど、そうせざるを得ない児童・生徒の「マグマ」に向き合う。

群馬県の嬭恋村出身で、佐久市在住の作家・南木佳士が、浅間山について、次のように書いています。同じように、群馬県（前橋）で生まれ育ち、現在、佐久

の地で暮らす者にとつて、浅間山に対する心の変遷を代弁していただいたかのような共感を覚える叙述で、知らず郷愁にかられます。

「大学を卒業してすぐ、佐久平の総合病院の研修医になったとき、南側から眺める浅間山の姿になんとなくなじめなかつた。北側の嬭恋から見上げる浅間はいかにも活火山といった荒々しくも孤独な様相でそびえているのだが、信州側の山容は火口のあたりが丸みを帯び、稜線も鋭さに欠けていた。噴煙をあげている処が、西から連なっているいくつつかの峰々の一つにすぎないように見えてしまうのも不満だった。万事に過激を好む若造の目には、鬼押し出しに代表される天明三年の大噴火の跡もあらわな、いかにも活火山然とした北面の男性的な姿の方がより魅力的に映った。〈中略〉

昭和五十六年二月の寒い朝、育ての親だった祖母が死んだ。

彼女の骨を裏山の墓地に納めたあと、雪をかぶった浅間山に目をやってみたが、その見え方の違いに愕然とした。いつものように火口からおだやかに噴煙がたなびき、鋭い稜線も青空との境界をくつきり際立たせているのだが、山全体がくすんだ灰色を帯びていた。

語り合う者を亡くしたとき、見慣れたはずの風景さえもがらりと形相を変える。〈中略〉

ちょうどそのころから、南側の、信州より見る浅間山のたたずまいに慣れてきた。〈中略〉

浅間山を背景に置くと、書いている小説に奥行きが生まれる。その深さが本物かどうか、つねに浅間山に問われつつ、書く。〈郷土出版社発行・定本「浅間山」・寄稿「浅間山麓で書く」より抜粋〉



東側の前橋から眺める浅間山は、県境の淡い藍色の連山の上に、ひとときわ高く美しくそびえています。嬭恋から見上げる荒々しさも稜線の鋭さもなく、はるか遠くに望む美麗にして孤高の山、それが

幼いころ見慣れた浅間山でした。

3年前の冬、老母が入院していた病室の西窓から、その、白く輝く美しい浅間山が見えました。子どもたちに見慣れた山並みを懐かしく見つめながら、当時は思いもかけなかつた、佐久側から望む秀麗な浅間山、トミーの頭から息を呑むように眺めた、黒斑山東側の絶壁と浅間山頂の間に広がる湯の平の壮大な景観、そして、立科町から眺望する、第一外輪山・黒斑山と対峙する浅間山がはつきりと目に浮かび、浅間山に問われつつ、生きることの有り難さを感じていました。と同時に、積年の習いか、「子どもたちも、自分の生き方や考え方を問い、戒める存在を持つてほしい……。」と考えていたことです。

## 相談時間等

月・水・金曜日

- 立科小学校／午前9時～午前11時30分  
電話 56-3131(呼)・有線2190(呼)
- 立科中学校／午後2時～午後5時  
電話 56-1076(呼)・有線2251(呼)
- 立科町児童館／  
午前11時40分～午後1時30分  
電話 56-0303(直通)  
有線 8889(直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の教頭先生へご連絡をお願いします。